

解放地域の復興・開発に係る取組

昨年はアゼルバイジャンにとって、アルメニア占領地域の大部分の奪還・解放という、歴史的な年となりました。本年からは、解放された地域の復興・開発、住民の帰還という、国家的な大事業が本格化しますが、これはアゼルバイジャンの経済社会政策や国家財政に多大な影響を与えるとともに、周辺国を含む広域的な経済開発の可能性も秘めています。既に国際機関や諸外国政府・企業からの復興支援やビジネス参入の動きも見られます。

復興・開発に係る取組の現状と見通し、注目される地域について報告いたします。

1. ナゴルノ・カラバフ(NK)を巡る今般の武力衝突

(1) NK 紛争は NK(ソ連時代にはアゼルバイジャン共和国内の自治州)の帰属を巡るアゼルバイジャンとアルメニアの間の紛争で、ソ連崩壊前後の武力衝突の結果、アルメニアが NK と周辺 7 県(アゼルバイジャン国土の 20%)を占領。以後、国連や OSCE ミンスク・グループによる和平取組が進展しない中、アルメニアがこの地域の支配を既成事実化してきました。

(2) 昨年 9 月 27 日に発生した武力衝突でアゼルバイジャンは戦闘を優位に進め、11 月 9 日の停戦合意により、被占領地域の大部分(シュシャ等 NK の一部と周辺 7 県)を奪還。ロシア平和維持軍の駐留、ロシアとトルコによる停戦監視センターの設置により、武力衝突は当面回避される見通しとなりました。(NK の残存地域の地位を巡る交渉は今後の課題とされています。)

2. 解放地域の復興取組の開始

(1) 約 30 年に亘り占領されてきた領土の奪還・解放に国内が歓喜に包まれる一方、政府にとっては当該地域の復興・開発、住民の帰還(NK 紛争に因る避難民は数十万人と言われています)、施政など、国家的な大事業、難題が控えています。

(2) 政府は早速 11 月 24 日に、「解放地域関連対策調整本部」を立ち上げ(本部長:大統領府長官、構成員:大統領・副大統領補佐官、各省大臣等)、政府挙げての取組体制を整えました。また、2021 年度予算では、復興事業費として 22 億マナト(約 1300 億円、歳出全体の 8%)を計上しました。

3. 復興取組の概要と見通し

(1) 初めに、解放地域の全域における地雷・不発弾の撤去という難題があります。90 年代の占領以降、今般の紛争までアルメニアによって撒かれた地雷をすべて撤去するには最

長 10 年を要するとも言われています。アゼルバイジャン地雷除去庁は、UNMAS 等国際機関や各国政府などに支援を呼び掛けています。

- (2) 次に、地雷撤去等安全が確保された地域から、道路・電気・ガス・水道等のインフラ整備が行われます。都市整備計画(市町村の復旧・復興)も順次取り進められる見通しです。ただし、解放地域の中でも、アルメニア住民が暮らしていた NK 内の市町村は住宅や都市機能が残されている一方、周辺 7 県では(軍事防衛線とされてきた経緯もあり)半ば廃墟に近い状態の市町村も多く、一様に都市開発が進められる状況ではない模様です。
- (3) この後、占領前にこの地域で暮らしていた住民の帰還が予定されます。数十万人と言われる避難民のうちどれだけの方が戻られるかは不詳ですが、帰還促進や生活支援を始め、長期に亘り相当規模の財政支出を伴う事業になることが見込まれます。

4. 解放地域での経済開発の可能性

- (1) まず、水資源開発が挙げられます。解放地域の多くは小コーカサス山脈に連なる山岳地域で、国内 2 大河川(キュル川、アラズ川)の支流も多く、アゼルバイジャンの水資源(貯水量)の 25%を占めると言われています。政府は、このような潤沢な水資源を活用し、農業等の灌漑用水や、小水力発電の整備を推進する考えです。また、水力以外の再生可能エネルギーとして、太陽光・風力発電の潜在性も大きいと述べています。
- (2) 解放地域(特にケルベジェル、ザンギラン等アルメニア国境に近い地域)は鉱物資源が豊富であり、相当規模の金鉱床が賦存しています。これまでも、アゼル・ゴールド社(鉱物資源開発公社)が近隣地域で金・銀の採取・生産事業を行っていますが、今後その拡大が見込まれ、既にウクライナ企業等のアプローチも報じられています。
- (3) 農業分野も有望視されており、作付可能面積は 20 万ヘクタール以上、占領前はこの地域の農産物生産は全国の 20%、畜産では 13%を占めていた由です。アグロパークと呼ばれる農産物加工拠点も整備される計画です。
- (4) 解放地域は風光明媚な土地で、古くから文化の盛んな地域でした。豊かな歴史・自然遺産(国家観光庁の説明では 900 か所)を活用した観光開発の可能性は先の経済トピックとしてご紹介したとおりです。特に、イランに住む同胞アゼルバイジャン人の来訪が期待されるようです。
- (5) このほか、エコ、デジタルと言った要素を取り込んだ近未来都市の設計、ハイテクパークの整備、「カラバフ大学」の開設など、先端的、知的な取組も企画されています。

5. 注目される地域① ～シュシャ～

- (1) シュシャは、NK の中心都市であるだけでなく、「コーカサスの真珠」と呼ばれる美しい自然と豊かな芸術・文化から、アゼルバイジャン人の「心のふるさと」として愛される、それ故に政治的にも極めて重要な都市です。(戦略上も NK の「首都」ハンケンディを 10km 先に見下ろす要衝であり、今次武力衝突でもシュシャ奪取が目標とされ、実際にシュシャ陥落が停戦合意の契機となりました。)

(2) このため、政府は解放地域の復興・開発の中でも、真っ先にシュシャの再興から取組を開始しています。12 月には、大統領の指示により、都市設計当局や電力、水道、道路等の公社からなる「シュシャ復興事業タスクフォース」が組織されました。シュシャにはこれまでアルメニア住民が暮らしていたこともあり、早期の都市機能回復が見込まれ、今夏には住民の帰還が始まる予定です。解放地域の復興・開発の先行きを見る上でも、シュシャにおける取組の進捗が注目されます。

6. 注目される地域② ～ナヒチェバン～

(1) ナヒチェバンは、アゼルバイジャン本土の南西にある、アルメニア領で隔てられた飛び地です。NK 紛争地域ではありませんが、今次武力衝突の停戦合意の中で、この飛び地と本土を繋ぐ回廊の設置(アルメニア領内)が盛り込まれました。かつては道路や鉄道で結ばれていましたが、アルメニアとの関係悪化に伴い、現在は途絶されているものです。

(2) この回廊により、トルコとアゼルバイジャン本土が陸続きで移動可能となり、トルコの東アナトリア地方からナヒチェバン経由カスピ海沿岸までの物流・交易ルートが誕生します。また、アゼルバイジャン本土からナヒチェバンさらにはトルコへの電力供給、逆に、トルコからナヒチェバンへのアゼルバイジャン産天然ガス供給(BTE パイプライン経由)など、同地の東西を繋ぐエネルギールートが開かれる見通しです。さらに、ロシア(回廊を管理するのはロシア国境警備局)やイラン(ナヒチェバンと国境を接する)も同地経由の交易を模索するなど、広域的な注目が集まっています。

(以上)